

ミニ企画展「あれモ！これモ！藻でできる」開催報告

小林弘幸¹・佐々木貴史¹・茅野真司²・中澤 敦²
・路川秀徳²・楠田恵美³・渡邊 信³

2017年4月22日(土)から6月30日(日)まで、つくばエキスポセンター(つくば市)で、筑波大学藻類バイオマス・エネルギーシステム開発研究センター、藻バイオテクノロジー株式会社の協力を得てミニ企画展「あれモ！これモ！藻でできる」を開催した。本展の目的は、筑波研究学園都市で行われている研究機関等の最新研究・技術を紹介すること、生活者目線の展示内容により藻類をより身近に感じてもらうことである。61日間の開催で30,000人を超える方々が本展に足を運んだ。

このミニ企画展は、来館者の方々に藻類と私たちの暮らしとの関係を知ってもらうことを入口に、藻類を活用したプロジェクトの紹介を行った。筑波大学も参画している「福島県再生可能エネルギー次世代技術開発事業」では、土着藻類を培養して行うオイルづくりなどを抽出・精製したオイルの実物展示やミニレラスウェイの動体展示とともに紹介した。加えて、微細藻類が産生するオイルから作られた化粧品も藻類研究の実用化例として取り上げ、来館者に実際に試してもらうことができるようにした。これは特に女性の関心を引いた展示となった。このような実物、体験的な要素は、来館者とのサイエンスコミュニケーションと相まって、老若男女問わず多様な来館者の藻類への興味・関心の喚起に寄与したと考えている。

このほか、会期中の5月20日(土)には、「国際植物の日」イベントの一環として「顕微鏡で植物を観察しよう」「体験教室『集まれ！未来の研究者たち』」を開催し、藻類をはじめとする小さな生き物の観察を通して植物の面白さ、大切さについて研究者たちと来館者がコミュニケーションを深めた。最初は戸惑いながらの顕微鏡操作も、慣れてしまえばミクロの世界の住人に心を奪われ、時間が過ぎるのも忘れて観



ゴールデンウィークで賑わいを見せるミニ企画展「あれモ！これモ！藻でできる」の様子(2017年5月4日撮影)



体験教室「集まれ！未来の研究者たち」の参加者と一緒に試料の採取を行っている様子(2017年5月20日撮影)

察する来館者の姿が印象的であった。

本展の見学者を対象に実施したアンケート調査(回答数88件)では、藻類と私たちの暮らしとの関わりについて「知らない」と回答した方がほとんどであったが、展示を通して藻類が油を作ること、関連研究が筑波大学を中心に行われていること、その成果が化粧品などに応用されていることなどに来館者が高い関心を示すことが分かった。エネルギー源としてだけでなく、健康、食、医薬への応用など藻類研究の幅広い可能性に対する来館者の期待の高さを感じたところである。

さて、今回のミニ企画展では来館者にもっと藻類への親しみを持ってもらいたいと、あるアイデアを実行した。筑波大学の渡邊教授の発案による藻類和名の公募イベントである。名づけの対象となる藻類は、霞ヶ浦(茨城県)で観察できる *Selenastrum bibrainum* Reinsch と *Gonium pectorale* Müller である。これらの藻類には、それぞれ「ムレミカヅキモ」「ヒラタヒゲマワリ」という和名が既にあるが、前述の目的とともに来館者の名称の考えやすさを考慮し、あえて特徴あるこの2種を選定した。期間中に子どもから大人まで幅広い年齢層の来館者から、それぞれ延べ42件、49件の公募があった。和名の選定にあたっては、一般的になじみがない学名の短所を補うものであることに留意し、一般の方々の意見も反映されるよう、①事務局でのスクリーニング、②来館者の一般投票、③選定委員による選定の3段階で行った。

事務局では、和名であること、意味を容易に理解できること、差別用語や不快な印象を与える用語を用いていないことなど一定の基準を設け、各24件に絞り込み、つくばエキスポセンターで一般投票を行った。その結果、*Selenastrum* 属は延べ934票、*Gonium* 属は延べ880票の投票があり、

この結果も踏まえ 2017 年 12 月 15 日に委員会を開催し、最終選定を行った。

委員会の委員構成は次のとおりである。

委員長：井上 勲（筑波大学 藻類バイオマス・エネルギーシステム開発研究センター 名誉教授／特命教授）

委員：中山 剛（筑波大学 生命環境系／藻類バイオマス・エネルギーシステム開発研究センター 准教授）

委員：吉田 昌樹（筑波大学 生命環境系／藻類バイオマス・エネルギーシステム開発研究センター 助教）

委員：瀬戸口 啓一（つくば科学万博記念財団 運営部長）

委員：佐々木 貴史（つくば科学万博記念財団 テクニカル職）

井上先生を委員長とする 5 名の委員会で、*Selenastrum* 属の和名は中学 1 年生（当時）、長沖守（ながおきまもる）さんの「シュリケンモ」、*Gonium* 属は小学 2 年生（当時）、大山裕翔（おおやまゆうと）さんの「ミドリエンバン」を選定した。選定にあたり各委員からはその発想の豊かさを評価するコメントを頂いた。ここにその一部を紹介したい。

シュリケンモ：「子どもらしい発想を買う（井上委員長）」
「突起の表現として非常にユニークでした（吉田委員）」
「男の子が考えた名前っぽいのが良い（佐々木委員）」

ミドリエンバン：「*Gonium* の形態をうまく言い表している（井上委員長）」
「すばらしい！形と動きをよく示している（中山委員）」
「形と動きを言い表している（瀬戸口委員）」

選定された名前以外にも、「マガリナリニモ」「タバヅキモ」「ホシヅキモ」（*Selenastrum* 属）や、「ズンダモチモ」「ヒマワリモ」「タンポポモ」（*Gonium* 属）など藻類の色や形状をユニークな視点で表現した秀逸な名称も数多く、選定は非常



藻類和名選定委員会の様子（2017 年 12 月 15 日撮影）

に苦労した。一方で、研究の世界とは異なる名前の付け方に委員の方々も楽しみながら選定頂けたようである。

今回のミニ企画展とその関連イベントは、筑波大学、藻バイオテクノロジー株式会社とつくばエキスポセンターが深い協力関係を構築して実施することができた。この時の展示の一部は、つくばエキスポセンターの常設展示に発展し、科学技術活動がもたらす未来に向けた取り組みの一つとして多くの来館者に見学頂いている。このような関係を今後も継続し、お互いの資源や強みを活かしていくことで、つくば発の藻類研究活動を社会に発信していきたい。

（¹つくばエキスポセンター・²藻バイオテクノロジー株式会社・³筑波大学 藻類バイオマス・エネルギーシステム開発研究センター）